

## 平地の杜づくりプロジェクト

— 宮城県石巻市北上地区

Forestation Project in Low-lying Areas in  
Kitakami, Ishinomaki City, Miyagi Prefecture

東日本大震災の津波により被災した低平地。

震災以前、集落を形成していた宅地は災害危険区域に設定され、  
住民は高台や内陸の土地に移転した。

残された土地は新たな住宅を建てることができなくなったため、多くが空き地のままとっている。  
石巻市北上地区ではその空き地となった低平地を平地の杜とする取り組みがスタートしている。



佐藤尚美 | Naomi Sato  
一般社団法人ウィーアーワン北上代表理事 /  
1973年生まれ。石巻市立女子高等学校卒業

#### 聞き手

岩佐明彦 | Akihiko Iwasa  
法政大学 / 会誌編集委員会委員長

佃悠 | Haruka Tsukuda  
東北大学 / 会誌編集委員会委員

前田昌弘 | Masahiro Maeda  
京都大学 / 会誌編集委員会委員

佃悠=文

fig.1 杜づくりワークショップ(2022年6月)  
で植樹する地域住民の方達。奥に防潮堤と  
北上川が見える(提供:佐藤尚美氏)



## 被災地での杜づくり

——現在取り組まれている平地の杜づくりの概要を教えてください。

東日本大震災で被災した、石巻市北上地区長塩谷集落の跡地で杜づくりの活動を行っています。元々ここには24世帯が住んでいたのですが、震災により集落が被災し、高台移転などで他の場所に住まいを移しました。6世帯が北上地区内に残りましたが、その他の世帯は他に転出してしまいました。手を入れない土地は自然と森に戻ると考えられがちですが、宅地として造成された土地は踏み固められており、そのままでは木が育ちません。現に、長塩谷集落も震災後10年経っても乾燥地に適応したセイタカアワダチソウなどの雑草で覆われた状態でした。

私たちは、2021年からNPO法人地球守の高田宏臣さんに指導していただき、土のなかから改善を行いつつ、この土地を平地の杜とする活動を行っています。盛り土という一般的な手法は、土地の記憶をリセットします。それは、したくなかった。そこで高田さんをお招きし、土中環境に着目した改善手法を学ぶ公開ワークショップをこれまでに3回開きました。各回20人から30人程度が集まり、土のなかに水や空気の通り道をつくるための溝を掘ったり、枯葉や燻炭、藁を重ねてつくったマウンドに植樹したり、という作業を行ってきました。普段は住民の方にも手伝っていただきながら、私たちスタッフを中心に作業を続けています。初めは苗なども購入していましたが、現在は、山で拾ってきたどんぐりから発芽させて育苗したり、土中環境整備に使用する枯葉や枝木を自分たちで集めたり、焼き杭を作ったり、自分たちでできることはできるだけやるようにしています。今頭を悩ませているのは鹿害で、植樹して育てきた苗が折られたり食べられたりしているので、鹿が苗まで近寄れないように低い柵を設置しようとしているところです。

### 荒れた低平地を残して復興したと言えるのか

——震災以降、ウィーアーワン北上ではさまざまな活動を行われてきたと思いますが、どのような経緯で杜づくりを始めることになったのでしょうか。

私は結婚して北上地区に住むことになったのですが、震災以前は夫の家族を含む9人家族で生活をしていました。家族は開口漁業といって、普段は会社員をしながら漁の解禁日(開口日)だけウニや鮑の漁をしたり、わかめをとったりということで生計を立て、自分自身はフリーランスで会計事務の仕事をしていました。しかし、震災で家族を亡くし、自分が大黒柱として3人の子どもたち



fig.2 震災以前（1990年3月）の長塩谷集落（提供：佐藤尚美氏）



fig.3 2021年9月に行った第1回ワークショップの様子。  
地域内外から参加者が集まった（提供：佐藤尚美氏）

を育てることになりました。一旦、市内内陸部の蛇田地区にある実家に戻っていたのですが、子どもの一人が北上地区の小学校に再度通うことになり、送り迎えのために北上地区に通うなかで自分自身の居場所が必要だと思ふようになりました。2011年には一人で活動を始め、2012年6月に仮設住宅の近くでプレハブを建て、牛乳など生活品を売ったりしていましたが、震災以前に北上地区のまちづくり委員をやっていた関係から、NPO法人パルシクが市から委託されていた復興応援隊に声をかけてもらい、被災者の支援を行うことになりました。仮設住宅のコミュニティ支援や、復興に向けたワークショップについての住民への事前周知やすり合わせなど、地元民

だからできることをやっていました。

2017年には法人格をとり、パルシクから引き継いで復興応援隊を受託することになりましたが、市が地域自治システムを作りたいということでその組織づくりを担うことになりました。しかし、市のビジョンが定まらないなかで事業を行うことの違和感や、法人を存続するために仕事をやり続ける矛盾を感じ、2年が終わったところで事業を受けることをやめました。地域自治システム的なものは必要だと思っていましたが、市の事業として取り組むのではなく、違う形で行う必要があると感じたのです。実際に住民の人へ話をしているなかで、「地域自治システムみたいなものはあったらよいが、自分ではやりたくない」という気持ちを感じとっていました。今思うと、事業としてやることで私自身も無意識に、地域のことを一生懸命にやる人はいい人でそうでない人は悪い人と、線引きしてしまっていました。ウィーアーワン自体も人を雇うために仕事をやり続けるような状態になりつつあるように感じ、解散しようかと考えていた2020年のある日、事務所のあったにっこり<sup>1</sup>から以前住んでいた白浜<sup>2</sup>に車で移動中に長塩谷を通りがかり、新しい防潮堤ができて荒れたままの低平地と北上川の美しい景色の対比を見て、ハッとしました。高台の山林を切り開き、そこに限界集落をいくつも作り、結果、元々暮らしていた低平地は荒れたままで残っている、それで復興したと言えるのだろうか、ここを北欧のような美しい雑木林にして、せめて負の遺産ではない形で次世代に引き継ぎたいと思ったのです。そこから本格的に杜づくりの活動を始めることになりました。

——実際にどのように杜づくりを始められたのですか。

——実際にどのように杜づくりを始められたのですか。

初めは周りには言わず、一人でYouTubeなどをみたり、論文を読んだりして調べてみましたが、なかなか思うようなものが見つかりませんでした。何人かの方に相談したときに名前が出たのが高田宏臣さんでした。つてをたどっ

て紹介してもらい、高田さんとオンラインでお話する機会を得ました。幸いにも高田さんに興味を持ってもらい、2021年3月12日に実際に現地に来てもらうことになりました。高田さんご自身も全国的に活動をされているなか、東北のために力になりたいという思いがあったようです。8月にオンライン公開勉強会を行い、9月には初めてのワークショップを開きました。外部の参加者も加えた公開日は1日だけでしたが、それ以外に3日間作業を行いました。自身の体力的には地獄の4日間だったのですが、この施工で景観や場の空気感がガラッと変わるのがわかったのです。それをきっかけにこの活動にすっかりはまり込んでしまいました(笑)。

現在、コアメンバーはウィーアワンの私も含めたスタッフ4名と林業や大工、団体職員の3名です。また、地区外の人に関わってもらう場所として「きたかみ園藝部」を立ち上げ、それぞれ自由に関わってもらっています。現在15人が登録しています。一緒に手をかけたり、考えたりする受け皿のような位置付けです。

——**杜づくりをするようになって、地域や住民の方など変化してきたことはありますか。**

杜づくりの土地は市から借り受けているのですが、元々人が住んでいた場所なので、まずは地区の住民の方達に了承を取る必要があると思っていました。ダメと言われたら止める覚悟でしたが、話をしたところ、植物を育てるのが好きだからあじさいを育てたいとか、そんな楽しいことをやるなら長生きして協力しないとイケないなど言ってもらえました。そのとき、もしかして、ひとりひとりの胸にある地域への想いに働きかけることで自然と動いていく、これこそが地域自治なのではないかと感じました。また、関わるなかで愛着が湧いてきて、この平地の杜を拠点として活動したいと言ってくれる人も出てきています。「平地の杜」自体がメディアになって、ここに関心を持ってくれる人たちが集まって、いくつものつながりができていることを感じます。

### 人のいなくなった土地を自然に戻す

——**杜づくりという時間軸が長い活動だからこそ、さまざまな人が自分なりの目的を持って関わることができるのかもしれないですね。杜自体だけではなく、コモンズを作ろうとされているように感じます。今後の取り組みについて教えてください。**

現在は市と復興庁の助成金で活動していますが、事業化して基盤を整えることが重要だと思っています。たとえば、企業研修の受け入れなどを行いたいです。また、まだ具体的ではないのですが、エコテリアの事業化と、苗木の圃場を兼ねた杜をつくることを考えています。エコテ

リアは自然素材を使ってつくる庭ですが、今私たちが持っている素材や技術でできると考えています。また、広葉樹は林業ではニーズがないと言われているのですが、今後はニーズが出てくると思っていますので、広葉樹の圃場とすることを考えています。SDGsはインセンティブがないのですが、環境省の旗振りで30by30(2030年までに国土の30%を自然環境エリアとして保全する取り組み)の議論が進められていますので、将来的に環境への取り組みはインセンティブが発生していくだろうと思っています。そこまではなんとか生きながらえたいです(笑)。世のなかの視点が大地に向いてきていると感じています。日本全国で限界集落が発生しているなか、人のいなくなった土地を自然に戻すという取り組みは各地で受け入れられるのではないかと考えています。東北で大地のことなら、この「平地の杜」だと言われたいです。

2023年1月29日、現地およびオンラインにて

- 1 元々、スポーツ施設や中学校が位置していた高台の地域。復興事業により北上総合支所、小学校、防災集団移転住宅地が建設されるとともに、北上地区の災害公営住宅が集約され、地区の新しい中心部となった
- 2 震災以前は海沿いに集落が形成され、夏には白浜海水浴場が開かれていた。現在は白浜ビーチパークとして整備され、地域で業務委託を受けている。ウィーアワン北上が事務局を務める



fig.4 地域の方との作戦会議(2023年1月、提供:佐藤尚美氏)



fig.5 育苗の様子(撮影:会誌編集委員)